

氏名	串田 紀代美
ヨミガナ	クシダ キヨミ
学位の種類	博士(学術)
学位記番号	博音第319号
学位授与年月日	平成31年3月25日
学位論文等題目	(論文) 民俗/民族を表象する舞踊の舞台化と系譜

論文等審査委員

主査	東京藝術大学 教授(音楽学部)	杉本 和寛
副査	東京藝術大学 教授(音楽学部)	畑 瞬一郎
副査	東京藝術大学 教授(音楽学部)	山下 薫子
副査	東京藝術大学 教授(音楽学部)	毛利 嘉孝

(論文内容の要旨)

本研究は、民俗/民族舞踊の国際的な舞台への進出について論じるものである。その前段階として、第1章では宝塚歌劇団における「日本民俗舞踊シリーズ」の公演と、渡辺武雄を中心に組織された日本郷土芸能研究会を主題化する。

宝塚歌劇団は、近代化の過程において伝統的な日本舞踊に洋楽のオーケストラで伴奏するという「新舞踊」によるレビューを考案した。しかし1950年代後半に、将来の舞踊の新たな方向性を模索し、民俗芸能に題材を求め、舞台化するという発想を得た。それが「日本郷土芸能研究会」である。新たな舞台創作の素材としてこの「日本郷土芸能研究会」の中心人物である渡辺武雄と、文化財保護という立場から宝塚歌劇団による民俗芸能の舞台化を支援した三隅治雄の協働的プロジェクトについて主に論じている。

本研究では、宝塚歌劇団が組織し運営にあたった「日本郷土芸能研究会」を、文化庁および文化行政関係者の後押しを受けながら、戦後初の全国規模で実施された民俗芸能調査と位置付け、両者が接近し相互に協力関係を築く過程を紐解く。同時に、資源化された郷土の芸能を利用しながら、海外公演も視野に入れながら、約20年間に及ぶ「日本民俗舞踊」シリーズを彩った「日本」「郷土」「民俗舞踊」の舞台演出の構成要素とその演出方法を分析する。その上で、これが単発的な舞台演出手法ではなく、日本民俗舞踊および日本民族舞踊の舞台作品に対する戦前からの演出手法の系譜であることを、通史的に描き出すための第1段階として考察する。

第2章では、宝塚少女歌劇団の海外公演に着目しながら、「民俗」から「民族」への視点の転換、および帝国時代の日本民俗舞踊と日本民族舞踊の舞台公演について論じる。宝塚歌劇団は近代化の過程を通して日本的な題材に洋楽で伴奏する形式の「新日本舞踊」を生み出し人気を得た。しかし1950年代以降、歌劇団の舞踊の新たな方針を探るべく海外公演を視野に入れた舞台作品の創作が急務となり、その素材として発見されたのが民俗芸能であった。

戦前の日本劇場においても、宝塚歌劇団同様、舞踊ショーの新たな進むべき方向として民俗芸能や民族芸能に素材を求め、舞台作品を構成する試みが存在していた。当時、東宝株式会社専務取締役の秦豊吉と日本劇場で演出を担当した佐谷功による「日本民族舞踊の研究」という取り組みである。本章では、渡辺武雄が携わった日本劇場の「日本民族舞踊の研究」、および宝塚か芸談「日本民俗舞踊」シリーズの2つのプロジェクトの契機ともなった宝塚少女歌劇団の海外公演の系譜を、戦時下の対外文化宣伝および対欧米文化政策という視点から分析した。

第2章のもう一つの視点は、日系舞踊家によるアジアの民族舞踊への取り組みである。テイコ・イトウの義兄は、世界的な舞踊家として著名な伊藤道郎の実弟である。その実弟の伊藤祐司とニューヨークで結婚した妻の日系人舞踊家テイコ・イトウは、日劇や東方舞踊隊の振付師として活躍し、帝国主義時代において日本舞踊をはじめ、朝鮮半島や東南アジアの舞踊を習得した。植民地時代、民族舞踊は大東亜共栄圏の「国民文化」として表象され「国民統合」という機能を付与された。帝国日本のイメージをいかに構築し日本をどのように他国に見せようとしたのか、あるいは日本を地政学的にどう位置付けようとしたのか、テイコ・イトウと東宝舞踊隊および日劇ダンシング・チームの戦中期の内地と外地における舞踊活動と民族舞踊の公演演目を分析しながら、舞踊をとりまく戦中の社会環境についても考察した。

ここまで論じてきたような、宝塚歌劇団と日本劇場に関わる日本人が民俗芸能および民族舞踊を発見し、資料を資源化し、題材として舞台化し、やがて海外へ進出する過程を踏まえ、第3章では戦後という時代性に焦点を当てながら、日本人立ち入り禁止空間の旧東京宝塚劇場内で繰り広げられた占領軍に対する日本人スタッフの舞台製作について考察した。とりわけ、劇場総監督に就任した伊藤道郎による演出方法について着目し、多数の国籍を持つ占領軍に対する公演の際は、一国の日本の民俗に題材を得るという舞台構成ではなく、世界の民族をさまざまな角度から切り取り舞台上に展示するという手法で、舞踊のテクニクを前面に出した演出方法について論じた。

終章では、第1章で論じた新たな舞台創作の素材として民俗芸能を発見した渡辺武雄と文化財保護行政の立場で民俗芸能の舞台化を支援した三隅治雄の協働的プロジェクト「日本郷土芸能研究会」と「日本民俗/民族舞踊」シリーズをさらに発展させ、国家間での民間文化外交の一環として展開された民族芸能の海外公演について論じた。1962年に文部省の補助金を受けて開設した国際芸術家センターと、その前身で1960年に創設された日本民族舞踊団は、民俗芸能研究者が主導して全国各地の民俗芸能を調査し、舞踊家に習得させ、国家を代表する民族舞踊集団の育成と民族芸能の舞台芸術化を実現しようとした。民俗芸能の現地調査や海外向民族舞踊制作には、専門委員として本田安次、郡司正勝、三隅治雄を交えた有識者、批評家、舞踊家などを集めた。

国際芸術家センターの「海外向民族芸能」の製作プロジェクトは、第3章まで論じた宝塚歌劇団や日本劇場における民俗芸能および民族芸能の収集調査をもとに、資料化し、舞台化していった。宝塚、日劇、アーニー・パイル劇場といった舞台で民俗/民族を題材として製作された舞台作品は、「海外向民族舞踊」製作プロジェクトによって、大衆化から芸術化への価値転換を目指した。

以上、民俗芸能の舞台化が、時代を経ていかなる変遷をたどったのかを検証し、戦前から戦後に至るまでの民俗/民族を表象する舞踊が舞台化された系譜について考察した。

(総合審査結果の要旨)

串田紀代美氏の学位申請論文『民俗／民族を表象する舞踊の舞台化と系譜』は、昭和初期から戦後昭和30年代までを中心に、宝塚歌劇団「日本郷土芸能研究会」(第1章)、宝塚少女歌劇団およびテイコ・イトウと伊藤道郎(第2章)、アーニー・パイル劇場(第3章)をその主たる対象として、国際的な視線に曝される日本の舞踊活動において、「民俗／民族」がどのように意識され活用されてきたかを具体的に描出したものである。全体を考察する切り口の1つには、民俗芸能研究において従来つねに議論的になってきた民俗芸能の保存と活用の問題について、活用を是とする立場から歴史的な諸活動の詳細を明らかにしており、本論文の大きな成果の1つとなっている。

第1章では、宝塚歌劇団に設置された「日本郷土芸能研究会」における民俗芸能調査とそれに基づいた舞台作品化の方法を、特に渡辺武雄に焦点を当てながら記述を進めている。戦後の文化財政策とも関連しながら、民俗から民族への展開という指摘は重要であり、また、本多安次・三隅治雄ら民俗芸能研究者の具体的な活動・言説から、彼らが民俗芸能の活用に積極的に関わっていたことを明らかにしていることは本論文の手柄といえるだろう。第2章では、昭和10年代におこなわれた対外文化事業としての宝塚少女歌劇団欧米派遣・戦時中慰問活動における試行錯誤やその問題点、伊藤道郎およびその義妹で舞踊家のテイコ・イトウの活動における「日本」の見せ方について論じている。第3章では、終戦後占領期に東京宝塚劇場が接收され、連合軍専用の慰安劇場としてアーニー・パイル劇場が運営される中で、伊藤道郎を中心とした日本人スタッフが、「日本物」をどのような演出でアメリカ人を中心とした観客に提供していたかの具体を描き出そうとしている。

豊富な素材や視点を持ち込みながら、日本的なものへの国際的な視線とそれを利用しつつ「日本」を表象しようとしてきた人々の活動を、特に本論文では民俗芸能を中心の1つに据え、また時代ごとの文化政策との関連性も踏まえながら明らかにしようとしており、その意図は十分に理解できる。ただし、審査委員からも多くの指摘があったように(さまざまなミスを一括して)、全体の構成や概念規定には大きな問題を抱えており、序章の混乱はその象徴ともいえる。また、第2章・第3章では構成の問題とともに、申請者が得ている豊富な資料や素材が活かされず、アーニー・パイル劇場に関する写真資料の扱いも含めて再検討が必要となるであろう。

しかしながら、そうした数多くの欠点を抱えつつも、本論文が明らかにしようとしている問題点のスケールの大きさや、その解決を可能にすることを予感させる豊富で丹念な資料調査など、本研究が博士課程を経て大きな展開を見せることが充分期待される内容となっており、学位取得にふさわしい内容であるとの審査委員の意見の一致をみた。